

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載
【部門区分】第 1 部門第 2 区分
【発行日】令和 7 年 5 月 26 日(2025.5.26)

【公開番号】特開 2024-116139(P2024-116139A)
【公開日】令和 6 年 8 月 27 日(2024.8.27)
【年通号数】公開公報(特許)2024-160
【出願番号】特願 2024-79152(P2024-79152)
【国際特許分類】
A 6 1 M 27/00(2006.01)
【F I】
A 6 1 M 27/00

10

【誤訳訂正書】
【提出日】令和 7 年 5 月 16 日(2025.5.16)
【誤訳訂正 1】
【訂正対象書類名】特許請求の範囲
【訂正対象項目名】全文
【訂正方法】変更
【訂正の内容】

20

【特許請求の範囲】
【請求項 1】

組織部位を治療するための装置において、当該装置が、
陰圧の供給部と、
溶液源と、
前記陰圧の供給部および前記溶液源に動作可能に接続されたコントローラ、とを備え、
前記コントローラが、
陰圧期間において組織部位に陰圧を送達し、
滴下期間において組織部位に滴下流体の充填体積を送達し、
バルブを開放して組織部位を周囲圧力または陽圧に曝すことによって、第 1 のパージサイ
クルを実行し、

30

前記滴下期間の完了に応じて、パージ頻度で滴下流体のパージ体積を前記組織部位に
送達することによって、第 2 のパージサイクルを実行し、
前記陰圧期間の前、または前記陰圧期間中に滴下流体の前記パージ体積を送達する、よう
に構成されていることを特徴とする装置。

【請求項 2】

請求項 1 に記載の装置において、前記コントローラが、前記陰圧期間において、滴下流
体の前記パージ体積を送達するように構成されていることを特徴とする装置。

【請求項 3】

請求項 1 に記載の装置において、前記充填体積が、滴下流体の前記パージ体積の少なく
とも 10 倍であることを特徴とする装置。

40

【請求項 4】

請求項 1 に記載の装置において、滴下流体の前記充填体積と前記パージ体積との比が、
10 : 1 から 5000 : 1であることを特徴とする装置。

【請求項 5】

請求項 1 に記載の装置において、前記充填体積が 10 ミリリットルから 500 ミリリッ
トルの範囲であり、滴下流体の前記パージ体積が 0.1 ミリリットルから 1 ミリリットル
の範囲であることを特徴とする装置。

【請求項 6】

請求項 1 に記載の装置において、前記パージ頻度が、5 分～20 分の範囲にあることを

50

特徴とする装置。

【請求項 7】

請求項 1 に記載の装置において、
前記充填体積が、10 ミリリットル～500 ミリリットルの範囲にあり、
前記パージ体積が、0.1 ミリリットル～1 ミリリットルの範囲にあり、
前記パージ頻度が、5 分～20 分の範囲にあることを特徴とする装置。

【請求項 8】

請求項 1 に記載の装置が、さらに、前記溶液源に流体結合された流体導管を備え、前記コントローラが、前記流体導管を介して滴下流体の前記パージ体積を送達するように構成されていることを特徴とする装置。

10

【請求項 9】

請求項 1 に記載の装置が、さらに、
前記陰圧の供給部に流体連結された第 1 の流体導管と、
前記溶液源に流体連結された第 2 の流体導管と、を備え、
前記コントローラが、前記第 2 の流体導管を通して滴下流体の前記パージ体積を送達し、
前記第 1 の流体導管を通して滴下流体の前記パージ体積を除去するように構成されていることを特徴とする装置。

【請求項 10】

請求項 1 に記載の装置が、さらに、前記コントローラに結合され、滴下流体の前記パージ体積および前記パージ頻度のうちの少なくとも 1 つを構成するための入力を受信するように動作可能なユーザインターフェースを備えることを特徴とする装置。

20

【誤訳訂正 2】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0055

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0055】

図 5 は、間欠パージサイクルを提供するように構成されたコントローラ 130 の例を示す。図 5 では、コントローラ 130 は、第 1 のパージサイクル 515 及び第 2 のパージサイクル 520 を周期的に作動させる。例えば、陰圧源 105 は、第 1 の流体導管を介してドレッシング 110 に結合されてもよく、コントローラ 130 は、弁を開放して第 1 の流体導管を周囲圧力又は陽圧に暴露することによって、第 1 のパージサイクル 515 を作動させてもよい。圧力上昇は、第 1 の流体導管から滲出液を押し出すことができ、第 1 の流体導管を遮断し得る滲出液の蓄積を低減することができる。同様に、溶液源 145 は、第 2 の流体導管を介してドレッシング 110 に結合されてもよく、第 2 のパージサイクル 520 は、第 2 の流体導管を介して溶液源 145 から比較的少量の流体を滴下することを含んでもよい。例えば、好適なパージ体積は、約 0.1 ミリリットル～約 1 ミリリットルの範囲にあってもよい。パージ頻度も変化し得る。いくつかの実施形態では、頻度は、約 5 分～約 20 分の範囲であり得る。いくつかの実施形態では、約 0.2 ミリリットルのパージ体積及び約 10 分の頻度が、ドレッシング 110 付近の第 2 の流体導管内の材料堆積を低減するのに好適であり得る。第 2 のパージサイクル 520 は、図 5 の実施例のように陰圧期間中、又は陰圧期間と陰圧期間の間に作動され得る。溶液のパージ体積は、いくつかの構成において、第 1 の流体導管を介して陰圧によって除去され得る。いくつかの実施例では、第 1 のパージサイクル 515 及び第 2 のパージサイクル 520 は、同時に作動され得る。

30

40